

第 42 回 2017 年 6 月 28 日(水)

ゲスト 木村弥寿彦 関西テレビ制作局制作部 専任部次長

テーマ 民放連盟賞受賞作品

ドラマ『大阪環状線～ひと駅ごとの愛物語～』誕生の背景

大阪人ならその名を一度は耳にしたことのあるあの駅、
この駅を一つずつピックアップし、愛の物語が紡がれていく。
「大阪環状線」を舞台にしたユニークなテレビドラマ。

主な内容

- ◎『大阪環状線』舞台に連続ドラマ～関西テレビ～
- ◎環状線 19 駅と特別編で 20 話のオムニバス
- ◎連続ドラマの自社制作 人材育成がねらい
- ◎関西では初めて「4K」カメラでドラマ制作
- ◎一話を二日間でロケ 厳しい制作費
- ◎深夜の放送時間だが 50 歳以上 (F3,M3) の男女も視聴
- ◎大阪弁のすばらしい会話劇 ネット配信で全国へ
- ◎演出・技術とも自社制作の連続ドラマ
- ◎ネットの普及でテレビの視聴習慣に変化 若者層に顕著
- ◎「4K」カメラで制作しても地上波での放送は困難

司会 「メディアウォッチング」の会では、以前から現役の放送人を招いて、お話を伺っておりましたが、現場の方は多忙で、OB・OG としましては声をかけ辛く何となく、ためらっていた事情がありました。今回、例会へのご出席をご了解いただきましたのは、まさに制作現場の方であります。ご紹介いたします。関西テレビ制作局制作部の専任部次長 木村弥寿彦さんです

木村プロデューサー (P)

関西テレビの制作部 木村弥寿彦と申します。よろしく願いいたします。(拍手)

司会 木村プロデューサーは 1995 年入社。関西テレビで彼が私といっしょであったときは、報道局の報道映像部に所属し、編集部員としてニュース、ドキュメンタリー番組を担当、その後 1998 年に制作部へ異動となり、現在はバラエティー番組やドラマの演出、プロデューサーをしておられます。
ということで、これまでに数々のヒット作品を制作。今や大変、えらいディレクターになっちゃったなと思っています。

【注】木村氏が制作、演出した主なテレビドラマ

『航跡～横山やすしフルスロットル～』（主演 北村一輝）

関西ディレクターズ大賞

『その街の今は』（主演 中村ゆり 鈴木亮平）

日本放送文化大賞準グランプリ

『ピロートーク～ベッドの思惑～』（主演 田畑智子 鈴木亮平）

民放連盟賞優秀賞

『YOU やまびこ音楽同好会』（主演 桐谷健太 菅田将暉）

日本照明家協会賞テレビ部門大賞

『大阪環状線～ひと駅ごとの愛物語』（パート 1、2 で 20 話制作）

第 3 話で民放連盟賞優秀賞

今日は「大阪環状線～ひと駅ごとの愛物語～」という番組にディレクター、プロデューサーとして関わってこられた木村弥寿彦氏を皆さんにご紹介したうえで、このユニークな発想がどのようにして生まれてきたのか、また久しぶりに登場した大阪発の連続テレビドラマをどんな制作体制で作りに上げられたのか、ご苦労なされた点もあわせて伺っていこうと思います。

<『大阪環状線』舞台に連続ドラマ～関西テレビ～>

木村プロデューサー (P)

今、経歴紹介でもありましたが、初め報道局の編集部にいましたが、現場にもっと出たいなということで、制作部に移りました。その当時は年に一本ぐらい、ネットドラマを作っていました、大阪制作の連続ドラマというのはなかったんです。それでも、助監督として何本か担当するチャンスに恵まれ、ドラマ作りの制作経験を積んできました。

テレビドラマというのはどうしても、東京中心の目線の物語ばかりでして、KTVはそのとき、火曜日夜 10 時の連続ドラマ『GTO』(出演 反町隆史 原作 藤沢とおる)とかやっていたんですが(視聴率 30%近い人気ドラマ)、関西の話ではありません。こっちでやれば、関西のネタがたくさんあるのに、そんな素材を使って、どうしてドラマを作らないんだろうかと思っていたわけです。

そんなとき、開局 45 周年のドラマで横山やすしさんのドラマを作る機会がありまして、そのとき全編、大阪弁のドラマを作りました。そのあたりから、普通に関西弁のドラマがあってもいいんじゃないかということで、これで連続ドラマを作りたいなと思っていたときに、昨今予算も減っていく事情なので、これも特殊な形なんですが、NTT の「ひかり TV」の映像配信業者の方から、「4K」作品のドラマを探していますという情報が入ってきました。それも連続で 10 本ほしいと言われていたので前々から考えていた企画を提示したというわけです。今回のケースは、予算は NTT ぷらら (NTT PLa La Inc) から出資してもらっていて、それならローカルでもドラマが作れるということになったのです。

一昨年、2015 年「大阪環状線～ひと駅ごとの愛物語」のパート 1 の制作にかかりました。オムニバスで 10 本、ひと駅ごとの 30 分ドラマを考えました。

俳優を、連続ドラマ 10 本で拘束する、しかも(東京から)大阪まで来てもらうとなると予算も大変ですので、制作ロケは 2 日間で撮るというのをノルマにして撮影を始めました。そして、登場人物は基本二人にして何とかクリアしました。

パート 1 では 10 駅取り上げ、2016 年 1 月から放送しましたが、何とか好評を得ました。実は、環状線には 19 駅あるので、あと 9 駅残っていましたので「環状線」パート 2 として引き続き制作することになったのです。そして今年 3 月までに特別編を入れて 20 話、全駅 (19 駅) を放送することができました。

次の一覧はその放送記録です。

テレビドラマ『大阪環状線～ひと駅ごとの愛物語～』(関西テレビ制作)

[パート 1] 2016 年 1 月 13 日～3 月 15 日 毎週水曜日 AM1:55-2:25 放送

[パート 2] 2017 年 1 月 18 日～3 月 22 日 毎週水曜日 AM0:25-0:55 放送

パート1

第1話	天王寺駅	「偽装カップル」
第2話	玉造駅	「私のカレは幸村様」
第3話	大正駅	「新しい海の出現」
第4話	大阪駅	「スナイパーと妖精」
第5話	新今宮駅	「狐悲櫻」
第6話	福島駅	「屋根の暗号」
第7話	大阪城公園駅	「始発電車が来るまで」
第8話	西九条駅	「トンネル横丁の悪魔」
第9話	野田駅	「最後のデート」
第10話	京橋駅	「KYOBASHI ON MY MIND」

パート2

第1話	鶴橋駅	「優しい追跡者」
第2話	弁天町駅	「船出の母」
第3話	桜ノ宮駅	「黄昏プールサイド」
第4話	天満駅	「妻の霊がカツラに取り憑いた男」
第5話	桃谷駅	「酒と泪と男とわたしたち」
第6話	森ノ宮駅	「わたしとウチ」
第7話	今宮駅	「獅子おどし」
第8話	芦原橋駅	「ダダダゆうてドン」
第9話	特別編	「撮り鉄19駅を巡る恋」
第10話	寺田町駅	「駅から歩いて52万5600分」

<環状線19駅と特別編で20話のオムニバス>

今日は、その中でパート2の私が演出した「弁天町駅」“船出の母”という作品（30分）をご覧ください（放送 2017年1月24日深夜0:25~55）。

「弁天町駅」の“船出の母”は

こんな筋書き 出演はキムラ緑子 波岡一喜ほか

「離婚届を提出し、これから自由に生きようと決意する昌子（キムラ緑子）。だが、息子・順平（波岡一喜）に不安を明かせず、つい明るく振る舞う。順平も母に将来の思いを伝えようとするも言い出せない。心とは裏腹について相手にきつくあたってしまう二人が弁天埠頭の思い出の場所を訪れる。」

ドラマのテーマは、冒頭流れるナレーションから読み取れる。

「人がいて、町がある。町と町をつないで電車が走る。
電車が駅に止まり、駅は人と人の出会いをつくり、そこに愛が生まれる。
色とりどりの愛がはぐくまれ、そしてまた一つ、物語が紡がれる」。

「弁天町駅」 界限がドラマの舞台。

このあと、取り繕わない生の大阪弁の親子の会話から始まる。

母 おーい

息子 改札まで 待っとけ言ったやろう

母 あんたが遅すぎたんや、もう。足が棒になってしもたわ、もう

息子 ハイ、ハイ えらいすんまへんな。ほんで離婚届けは？

母 今日、朝な、 走って出してきた

息子 まさか、こんなことにな、熟年離婚とか、週刊誌の見出しだけの話やと思ってた

母 ようやく自由になれた

息子 自由になって、オカン、一体なにがしたいんや

母 なにもこれもや決まってるやろ。人生これからが本番やないかと
とりあえず、せいせいしたしな。

今日はこれから行きたいところ、あんねん。

忙しいやろ、付いて込んでいいよ。

息子 今日、いろいろオカンに話したいこと、あるねん - - -

(例会の会場には、DVD に記録された映像が流れる)

連続テレビドラマ「大阪環状線ひと駅ごとの愛物語」は、環状線にある 19 の駅を
毎回取り上げ、一話完結で、テーマを設定して“愛の物語”をつづっていく構成に
なっている。関西出身の俳優が語る大阪弁が作品のユニークさを際立たせている。

司会 (30 分のドラマの映写が終わる。司会者から木村プロデューサーに質問)

私この手のものには、とても弱いのですが、(主演の) 緑子さんは関西の人ですか。

木村 P 淡路島出身なんです。だから大阪弁は大丈夫です。

司会 男の役者は何という人ですか。

木村 P 波岡一喜さんという方で、この方も大阪出身で、最近、又吉直樹の『火花』で話題になりました(Netflix で 2016 年放送されたドラマ、10 回シリーズ)。

司会 二人ともネイティブで大阪弁が話せる人ですね。先ほどこの連続ドラマの成り立ちを聞きましたが、どんな風な布陣でやったのですか。そのあたりの取り組みをお聞かせください。

<連続ドラマの自社制作 人材育成がねらい>

木村 P まず連続ドラマを作りたい。今後の人材育成のことを考えると、単発ドラマより、連続ドラマのほうが育つというのがありますし、単発ドラマだと制作が年 1 本です。いつもの監督が集まって、いつものカメラマンで撮る。引継ぎがあまりないのが現状です。しかし連続ドラマで 10 本制作することになると、この回、助監督したものが、次は監督をしたり、カメラマンの場合も、アシスタントをやっていた人が今度はチーフでカメラを振ったりとかできます。連続ドラマを制作していると、このようにスタッフの起用が柔軟にでき、人材育成のためには有効です。関西で作る連続ドラマというのは、先輩方が作っていた時代にはたくさんあったと思いますが、今は各局とも深夜に単発ドラマがあるぐらいで、昼間の連続ドラマもなくなりました。

ただそこを絶やしてしまうと、ドラマ制作が全くなくなってきていて、逆に東京から大阪に(ドラマを)作りに来るというケースが多くなってきています。東京のスタッフがぱっと来て、適当に撮って帰っちゃうという、これではこっちとしては、あまり、人は育たないんですね。そういう話はたくさんあるんです。例えば、梅田駅周辺を走っていて、次は新世界の前を走っているとか、そんなの普通あり得ないんですが、東京から来て撮影すると、そんな作り方しかないんですよ。

当然のことですが、大阪のものはやはり大阪の放送局の人間が作るというのがベストですね。そしてやがて、関西発の連続ドラマが全国ネットで見てもらえるのが理想かなと思います。そのためには人材育成というのは欠かせない、(これを機会に)ローカルですが、連続ドラマを作り続けたいという強い希望を持っています。

司会 木村さんの立場としては、人材育成のほうに力点を置かれているんですね。

木村 P いや、私は 10 年前からプロデューサーと演出の両方をやってきました。PD 的な立場(プロデューサー、ディレクター)でドラマ作りに関わっていました。

(司会者からここで関西テレビ社報(No.518)が紹介される。「右も左も分からない 助監督デビュー」スタッフの中には営業から制作に異動になった人の苦心談)

司会 社内的にもドラマを作りたいという希望者がいるんでしょうね。プロデューサーとしてどのようにチーム作りをしたのですか。

木村 P 新人社員のなかにもドラマ志望の人がいますので、そういった人材をピックアップしました。なるべく制作じゃなくても、技術であっても、カメラマンのアシスタントにつけてくださいとか、照明のアシストでいいので現場をなるべく見たいとか、ドラマ制作の未経験者も参加してもらってチームを作っていました。役者さんからすると、ローカルで放送するドラマにしては現場の人数が(スタッフ)がすごく多くて、映画並みの人数ですねと言われました。実は勉強しにきている人間が多く、実際はもっとこじんまりとした(体制の)ほうが作りやすいんですが、でもドラマ作りの現場をそういった人たちにも見てもらったほうがいいので、大きな現場になってしまいました。

司会 そうすると、スタッフの平均年齢は凄く若いですね。

木村 P そうですね。

司会 弊社の事情ばかり話してもなんですが、わが社の福井澄郎社長は今年も年頭のあいさつで「関西でテレビドラマを作っていきたい」と言っておりましたので、そのあたりの会社の理解もあり、こういった企画がスムーズに実現した背景があったのでしょうか。

<関西では初めて「4K」カメラでドラマ制作>

木村 P この「大阪環状線」ドラマは配信業者の「NTTぷらら」の出資を受け、制作しているのですが、当然このドラマはネットの動画ソフトとしてアップされています。実際この放送業界というのも、放送だけではだんだん成り立たなくなっていており、そういう意味では、配信ソフトで一番、有意義なものはテレビドラマなんですよ。情報番組は何度も繰り返し見るようなものではない。情報はどんどん更新されていきますから。ところがドラマというのは、今後大阪でもどんどんコンテンツとして重要になってくると思います。その点、経営者のほうもそういう視点をもってあるんじゃないかと思っています。

司会 このドラマは「4K」で撮影しているんですね。「4K」でドラマを作っていくことのメリットとか、それから「4K」という番組がこれから一般視聴者にどう受け入れられるのか。そんなことを見通しての「4K」作品ですか。

木村 P 「4K」が主流になるということなのですが、実際、海外ではアメリカの連続ドラマはほとんど「4K/HDR」(Dynamic High Range)対応になっています。

「4K/HDR」は光を細かく再現できる(明るさの情報の幅を拡大する技術)。「4K」は部分の詳細を細かく見せる。今はHDRというのに取り組み始めています。

海外の配信業者Netflixもそれが主流になってきていますので、やっぱりHDRになってくるのかなと思っています。

この「大阪環状線」は、関西では「4K」で制作した初めての連続ドラマ作品です。撮影的にはそれほど特別な大変さはないんですが、機材が高額であることと、編集段階での加工であるとか、撮影終了後の作業ポストプロ(Post Production)の時間が倍以上かかります。それに新しい機材を使いますので、演出面でも技術サイドにおいてマスターしてもらう能力が必要になってきます。

ただ「4K」での地上波放送は予定されていません。BSでは来年12月から「4K」放送が始まる予定です。「大阪環状線」ドラマがBSで高精細映像の「4K」で放送されることになるかもしれません。

地上波のドラマチームは「4K」で撮っていることを意識していますが、大半のスタッフはまだひしひしと感じているところまでいっていません。今のところ、(地上波では)放送できないが、ソフトとしてどんどん「4K」になってきています。

司会 「大阪環状線」ドラマのストーリーのほうに戻りますが、全部で20本(特別編含む)、これはひと駅ごとの特徴とか、物語はどんな人がどのように作ったんですか。

<一話を二日間でロケ 厳しい制作費>

木村 P 脚本家もなるべく、これからの人を起用するというで公募制にしました。ただし、すべてに対して公募するのではなく、粗筋だけを公募して、その中からいいのを選んで、それをもとに脚本を書くというやり方でした。例えばパート1だと50~60本公募があって、その中で駅のバランスであるとか、内容とか、これは特徴が出ているとか、そういうのを選んで、(脚本を)書いてもらうという形をとっていました。東京の作家も多いが、関西出身の作家からも選びました。

司会 今見たこのドラマでは、埠頭が出てきたり、海のシーン、そして古い建物が映し出されたりしていましたが、これらはもちろん現実にあるものですか。

木村 P 実際に現場に行ってロケし撮影したものです。

司会 ああいうところを含めて一話一話を2日で撮らなければいけないという制約があ

るようですが、ロケの準備というのは、大分かかったのでしょうか。

木村 P ドラマ制作の準備はどのドラマもいっしょだと思うんですが、2日プラス雨の予備日というのを設定していましたが、そこは2日でなく、3日ほどかけたほうが体力的にはいいんですが、予算的には俳優やスタッフの拘束のことなど厳しくなります。そこは我慢してもらいながらなので、しかもこの作品は夏の撮影でしたので、現場は厳しかったですね。

司会 現役のアナウンサーも出演していたようですが、社員もかなり動員がかかっていたのですか。

木村 P そういうわけじゃないです。関純子さんは特別編で出演してもらいました。駅そばのおばあちゃん役でした。

司会 (手もとに配られた)番組紹介の一覧を見ていただきたい。「天満駅編」の“妻の霊がカツラに取り憑いた男”。ここの写真を見ていただくと、どこかで見たような男が写っています。山本浩之さん、今、「ちちんぷいぷい」(毎日放送)で司会者として出演している、元関西テレビアナウンサー、彼が主演でドラマに出ているんですね。

木村 P そうです。これも偶然、東京の若い作家で、そういう亡くなった妻がカツラに取り憑いて、旦那の再婚相手を一生懸命応援するというストーリーがありまして、この脚本を読んだときに、スタッフのみんな、これはヤマヒロ(山本浩之)さんの話ではないかということになりました。ところが山本さんは昼から夕方まで「ちちんぷいぷい」で(日程が)押さえられているので、日曜日をロケ日に決め、2週にわたって撮影しました。

ヤマヒロさんには昔、横山やすしのドラマのときにちょっとタクシー(の運転手)役で出てもらったことがあるんですよ。そのとき、芝居心があるというか、器用だなと思っていましたので。主演というのは重荷ですが多分クリアできるのではないかと思います。

司会 中江有里さんって、なかなか味のある女優さんと一緒でしたね。

木村 P 夕方ワイドニュース「アンカー」のときのコンビです。

【注】「アンカー」

関西テレビ「スーパーニュースアンカー」(2012年～2015年)

キャスター山本浩之 コメンテーター中江有里

司会 この中江さんという方は読書家で、書評も書いている有能な女優さんです。

木村 P もともと「朝ドラ」(NHK)の出身です。

司会 あっちこっちの駅で撮影するにあたって、現地の方の協力があったんではないですか。

木村 P まず JR 西日本が協力してくれました。駅構内の撮影など全面的な協力を得ました。宣伝も全面的に協力していただきました。どの駅も駅前に商店街がありますが、すごく協力的で、玉造駅前(パート 1)の商店街では、エキストラはみな我々がやりまると言って気軽に出演してくれました。

司会 関西を舞台にした、あるいは大阪で作るドラマは大変少なくなりました。そのあたり、関西テレビを PR する宣伝効果があったんではないですか。

木村 P そうですね。このドラマの放送は超深夜午前 1 時台 (AM1:55~) でしたが、今日見ていただいたパート 2 は 30 分繰り上がり午前 0 時 25 分スタートになりました。午前 2 時台にかかるとなかなか見てもらえませんでした。

出席者 パート 2 は 2017 年 1 月から 3 月までで終わり、そのあとまた新しいシリーズをやっておられるのですか。

木村 P まだ公表していないのですが、パート 3 をやろうと動き始めているんです。

司会 同じように駅(環状線)をめぐるドラマを展開していくんですね。

木村 P テーマである「愛物語」を若干ニュアンスを変えてやるという感じですね。

司会 このドラマを作ってみて、改めて大阪、大阪弁の良さ、そして「大阪環状線」の味わいみたいなものを見つけ出すことができましたか。

木村 P 各駅に特色がありますし、寺田町駅とかには、実際降りたこともないのに、駅を降りて町を歩いてみると、味わい深い話があったり、歴史もあつたりしますので、それはそれでスタッフも改めて自分の町の何かを知るという風な経験をしたのではないかなと思います。

司会 深夜での放送でしたが、視聴率とか、一般視聴者からの反応はどうでしたか。

<深夜の放送時間だが 50歳以上 (F3,M3) の男女も視聴>

木村 P パート1の午前2時台より、パート2は深夜とは言え、1時間以上繰り上げての放送でしたので、視聴率も倍くらいあがっています。倍と言っても深夜ですから、2%とか3%ですが、反響もいろいろ大きかったですね。

深夜にしては、結構 F3 とか、M3 の方に見てもらえたので、放送時間がもうちょっと夕暮れとか、朝とか、午前中というのも考えていいのかなと思っています。

【注】視聴者層の区分 F3層 女性50歳以上。 M3層 男性50歳以上。

司会 再放送の予定はないのですか。

木村 P 今のところ分かりませんが、パート3を放送する前、今年のも暮れにもパート1、パート2の再放送があるかもしれませんね。

司会 今回の連続ドラマを制作した経験から、社内的な反応、反響を含めて、大阪でテレビドラマをシリーズで作ることの可能性をどんな風に見ていますか。

木村 P 大阪でドラマを作るというのは、なかなか出演者、人材不足というのがありますし、俳優が基本的に東京に拠点を置いている人が多いので、予算もかかりますので、それは大変ですね。ただ今回のドラマ作りから多くのことを学びました。番組作りの一から、自分の考えた小道具を役者さんが使ってくれるとか、撮影場所についても何回もお願いして頼んだロケ場所が採用されたりとか、本当にもの作りの一つ一つから作り上げていくという体験ができるので、若手スタッフの間では、ドラマって、こうなんだと実感し、凄く感動した人が多かったですね。

実際、他局系の制作会社の人も「4K」カメラ(機材)を見に来たり、カメラマン同士のつながりも強まりましたね。そういう意味では、もう一度関西でドラマを各局で作って、盛り上げていこうという可能性も見えてきました。

司会 木村プロデューサーの過去に制作した作品群をみると、「大阪」「関西」にこだわった作品が多いようですが、その理由は何ですか。

木村 P こだわっているというか、いろんなドラマがあっという間ですが、いつも使っている言葉でドラマを作るほうが、より良いなと思っているんですね。普通、関西弁のドラマというのは浪速の金融道とかやくざ者ばかりで、そうじゃなくて、日常的

な感じの関西ドラマというのがもっとあっていいのかなと思っています。
以前、私が演出したドラマ「その街の今は」（原作 柴崎友香、芥川賞作家）も
特別何か、ドラマティックなものがあるというのではなく、関西弁でつづるごく日
常的な話なんです。
もっと関西の普通のおもしろさというものを題材にしたドラマが作れないかと
常々考えています。

（木村弥寿彦プロデューサーの「大阪環状線～ひと駅ごとの愛物語」についての
制作論を伺ったあと、例会出席者との質疑に入る）

<大阪弁のすばらしい会話劇 ネット配信で全国へ>

出席者 この連続ドラマは、ユーチューブでとても楽しく拝見いたしました。大変すばらしい大阪弁の世界に浸らせてもらいました。大阪制作のドラマでも大阪弁のセリフが面白くないんですよ。NHKの土曜日夕方6時台に放送している「みをつくし料理帖」は江戸時代の料理番組ですが、主演の黒木華さんは大阪出身なのに、大阪弁はめっちゃくちゃでしょう。ディレクターがちゃんと指導し注意できないからダメなんですよ。

木村 P 会話劇にしようと思いましたので、大阪弁は難しいですが、いろいろありますから。大阪弁といっても南のほうから、船場付近の雰囲気も違いますし、また尼崎のほうも違いますね。

出席者 劇中の二人の大阪弁は、いかにも下町のごくごく普通の家庭の会話に見えました。久しぶりに気持ちのいい大阪弁を聞きました。

出席者 大阪で連続ドラマを作るというコンセプトでスタートされたようですが、大阪環状線という舞台を選ばれた理由をお聞かせください。それからもう一つほかにも企画が出されていたんですか。

木村 P あらかじめ用意していた「大阪環状線」という企画を出したら、そのまま採用されたんです。バラエティー番組のディレクター、プロデューサーをしていたころ、よく環状線沿線を舞台にグルメ番組を作ったりしていたんですよ。そういう経験から「大阪環状線」をテーマに連続ドラマが作れないかと思っていました。
それで、そういうタイミングが合ったんですね。初めはNTTぷららが中心で配信するということでしたので、全国の人が見られる状況なので、大阪色が強すぎないかという意見があったのですが、意外と配信業者の人が逆にそっちのほう等特色

があつていいということになったんです。逆の発想でこの企画が採用されたということになります。社内的には、全国の人が見るのにちょっと“大阪”“大阪”になり過ぎていないかという意見があつたことも事実です。それが配信業者の逆の発想で推していただき、実現したということになります。

出席者 スタジオドラマにしなかった理由は何かありますか。

木村 P それは関西の物理的な事情です。セットを立てるスタジオがないんですよ。局にはスタジオがありますが、バラエティー番組の制作などで稼働しますので、使えないわけです。セットを立てたり、ばらしたりすると、お金(制作費)がかかる。だからロケでないと物理的に無理でしょうね。昔の毎日放送なんかの場合、千里スタジオに使用できるスタジオがあつて連続ドラマの制作が可能でしたが、関西テレビはスタジオが限られていて、しかも今、関西にはドラマが作れる貸しスタジオがないのです。

出席者 毎日放送の千里スタジオでも、効率は悪かったですよ。
昔、バラエティー番組をやっているときに「あまからアベニュー」で環状線の沿線を取り上げました。環状線でネタがなくなると、次は御堂筋線ということになるんですよ。

出席者 つい最近、弁天町駅に行ったんですが、駅境界が凄く変化しているのに驚きました。今日見たドラマでも、港周辺の町の変わりようを描いていましたが、19話のドラマの中にそういった町の変化を必ず入れておられるのですか。

木村 P ドرامは全部駅からスタートしているんですが、そういう変化を必ず入れているというわけではありません。基本は町と人をテーマにしているので、町の風景をしっかりと見せていくんですが、その中でドラマを見ていて“町も変わったな”と気づく人はいるでしょうね。
昔の日生球場跡地に複合商業施設「もりのみやキューズモール **BASE**」ができて、大きく変化しているので、森ノ宮駅のケースはそういう演出もしていますね。

出席者 スタッフは全部男性でしたか。

木村 P 女性の監督が二人います。一人は関西テレビ、それから、関西テレビグループの制作会社メディアプルポから女性監督がきています。

出席者 関西テレビでドラマを作れるディレクターは何人ぐらいいますか。

木村 P 5～6 人いると思います。

司会 私が入社したときには、連続ドラマを 3 本ぐらい制作していましたから、社内にドラマを担当するディレクターがいるのはごく当たり前の光景だと思っていました。ところが今や、放送局でありながら、ドラマ制作の現場を見ることができなくなったのは非常に、悲しく、気の毒だなと思います。

出席者 スタジオではなく、オールロケで作っておられる「大阪環状線」の制作費はいくらですか。

木村 P 格安です。

出席者 大阪でドラマを制作するという事は、なかなか厳しい状況の中でいろんな工夫をされながら、(ロケ撮影を)2 日間でやる。制作会社との関連など制作体制はどうなっているんですか。

<演出・技術とも自社制作の連続ドラマ>

木村 P 今回の撮影は、基本は自社ですね。まずカメラマンなど技術はほとんど自社のスタッフでした。あと制作は 10 本のうち 7 本は自社で、3 本はメディアプルポ〈関西テレビグループの制作会社〉です。わが社の技術は、火曜日 9 時の連続ドラマの制作(年 1 回ワンクール)で毎年東京に出張してやっていますので、連続ドラマを作る体制が整っています。

出席者 やっぱり、そういうのは役立つと思います。当初はみんな思いを込めてやろうというが、途中でどこかで無理ができて長続きしない。だけど、ドラマを作り続けるということは、一つは小道具とか、いろんな関連の会社も含めて全体のドラマを作る力というのがよみがえり、もの作りがだんだん出来やすくなってきています。ドラマ作りをいったん止めてしまうと、そういった環境がなくなる。例えば小道具さんなどが東京へ行ってしまうとか、テレビドラマを作りづらくなっていきますね。

出席者 関西では、大道具はもっとダメなんでしょうね。

木村 P セットを作るということですね、ドラマでセットを作れるチームというのは、確かに少なくなっていますね。バラエティー番組のセットについては普段からやって

いるので出来るとおもいますが。

出席者 感心しました。技術、演出の部分を含めて自社で深く関わって、ドラマを作り上げているというのは凄いことで、絶対頑張ってもらいたいですね。地上波で残るのはドラマだと思っています。テレビドラマというジャンルがテレビから消えることはないでしょう。

出席者 関西におけるドラマ制作の状況は、関西テレビ以外ではどうなんですか。

木村 P 毎日放送は昔、昼の連続ドラマを制作していましたが、それはなくなりました。今、深夜枠で東京発注のドラマが放送されています。それから年何回か、月曜日の2時間ドラマを2本ぐらい制作しているんじゃないですか。朝日放送も時々深夜ドラマを放送している。読売テレビはプロデューサーだけですが、深夜ドラマを東京で作っています。関西テレビも火曜日の夜9時のテレビドラマ枠はありますが、大阪でドラマの帯番組というのはありません。関西の放送局では、自社で連続ドラマを作っているというのはなくなりましたね。本当は関西で制作するテレビドラマ枠が帯番組としてレギュラーで設定されておればいいんですが。NHK以外、大阪制作のドラマはなくなりました。

出席者 テレビドラマは絶対帯番組として放送しないとダメですね。視聴習慣がないと定着しません。

出席者 ドラマ志望の人が集まって、関西においてテレビドラマを復活させようという動きは社内では出てきませんか。

木村 P そんな雰囲気が出てきています。この「大阪環状線」ドラマがきっかけで何とかしなければいけない、そういったムードが社内に出てきました。なんとか関西から全国へ打って出るというのが、次の大きな目標です。

<ネットの普及でテレビの視聴習慣に変化 若者層に顕著>

出席者 この「大阪環状線」のドラマをリアルタイムで見た視聴者と、例えばユーチューブとかのネット配信を別の時間帯で見た視聴者の数の比較データはありますか。

木村 P 僕にはそのデータは、分かりませんね。

出席者 深夜の時間帯に放送されるドラマなどは、ネットで自分の都合のいい別の時間帯で見る視聴者のほうが多いのではないかとされています。テレビを通してリアルタイムで放送するという意識をあまり持たないほうがいいのかもかもしれません。私の孫なんかの視聴習慣を見ていると、テレビで放送される番組を、ちゃんとネット、ユーチューブで見ているんですよ。(テレビ番組を)リアルタイムで見ないんですよ。何故その番組を見るのか聞くと、友だち同士で話題になっているからというのです(ネット上にアップされているテレビ番組)。我々の認識では、リアルタイムで放送されるのがテレビの番組であると思っていたが、実はそうではなくて、リアルタイムでないほうがよく見られているという現象が起きている。そういう時代に入っていると考えたほうがいいのかもかもしれません。

出席者 見逃し配信サービスというのがありますね。

【注】民放公式テレビポータル「TVer ティーバー」ほか。
見逃し配信サービスは無料のところが多い。

出席者 そうですね。リアルタイムで見るという通常のテレビ視聴の習慣は、今の若者にはないんでしょうね。我々の時代では、見たいテレビ番組があれば、学校から早く帰ってリアルタイムで見たもんです。今の人は全くそういう意識はありませんね。長時間ドラマでなくても、今日見た「大阪環状線」ドラマのようにシリーズで、例えば30分ものでもこれから良い商品になっていくんでしょうね。いい枠ではないかと私は思います。ぜひリアルタイム視聴じゃない、ネットなどで見た人のデータが欲しいですね。

出席者 先日、大阪・十三にある「第七劇場」に行って、東海テレビ制作の「人生フルーツ」(2016年制作、2017年公開)を見てきました。結構、お客さんが入っていました。今日見せてもらった「大阪環状線」物語も「第七劇場」で上映できるのではないですか。

【注】「人生フルーツ」愛知県春日井市に住む老夫婦の日常を描いた作品。
東海テレビは2011年～2017年までにドキュメンタリー番組10本が映画化され、劇場公開。

木村 P 最近、テレビで放送されたドキュメンタリー番組が映画化されるケースが増えていきます。わが社の「みんなの学校」〈関西テレビ制作〉も映画化され、2015年劇場公開されました。

出席者 テレビの視聴率といえば、1%が何万人という数字になります。劇場の場合、たっ

た数百人と思ってしまうんですが、実はネットにのると、その数字はもっと大きくなり、若者を中心にそのネット配信で映像作品を見るということが定着し始めている現状があります。

木村 P スポンサーとの関係がどうなっていくか、つまり録画したものは基本的には CMをとばして見ますので、これだけの人がアクセスしているといっても、スポンサー側からすれば、それではCMをどれだけの人が見たかと疑問を呈するでしょうね。営業的に考えると、ネット配信はまだ課題が多いですね。

出席者 現役の方をお願いしたいのは、ほかのメディアのことはお考えにならないで「テレビである」ということを意識してほしいですね。

出席者 先ほど「環状線」物語の制作体制の話が出ましたが、自社のスタッフで作っておられるということは、もの凄く貴重なことですね。50年も前にドラマを作っていた人間からすると、いろんな状況はほとんど変わらない。もっと厳しくなっているわけですが、その中で自社のスタッフで(ドラマを)作られているというのは凄く値打ちのあることだと思います。ほかのジャンルの番組でも携わったことがありますが、テレビドラマというのは作り上げるということ言えば、一番労力を要するのです。プロデューサーだけ自社から出して、スタッフは、ほかから借りてきてドラマを作るというのでは値打ちはないと思います。今回の作品を自社スタッフだけで作られているということは、それを知った若いたちに大きな刺激を与えたのではないかと思います。あの番組を見て応募しましたという若い人が入社試験でそろそろ出てきていませんか。

木村 P 出てきていると思います。

出席者 「大阪環状線」のドラマをずっと見ていました。ああいう番組を自分が作れるならと思って、関西テレビの入社試験に応募しました。こういう人が出てくるんじゃないかなと思います。

出席者 新しいシステムのカメラで撮っていますか。

<「4K」カメラで制作しても地上波での放送は困難>

木村 P 全部、「4K」カメラで撮っています。

司会 <関西テレビ本社の>技術スタッフが東京のドラマ作りに参加して、また大阪に帰

ってくるというシステムがあることは、知りませんでした。

木村 P 東京・世田谷にあるレモンスタジオ（関西テレビ 100%出資の貸しスタジオ、TMC 東京メディアシティの中にある）で収録しています。この前の「嘘の戦争」（主演 草薙 剛 火曜日夜 9 時〜）もメインのカメラなど、自社のスタッフで行っています。

出席者 民放の地上波では「4K」「8K」で制作した作品はオンエアしないのですか。

木村 P 地上波では（周波数帯域の問題があつて）できない。BS では実際に放送されます。

出席者 総務省が「4K」「8K」を地上波で放送できるシステムを募集しているようです。

出席者 民放連は、「4K」「8K」には消極的なんでしょう。

出席者 安い制作費でやるというのは大変な作業だと思います。我々の頃、今から 30~40 年前に新人の制作者(ディレクター)を発掘しようと制作費 400 万円で企画を募ったことがあります。
あの当時は高津商会であるとか、京都衣装であるとか、大道具、小道具を担当する集団がいましたから、今日発注して明日と言っても、スタンバイ出来たわけですが、今、それはないでしょう。

木村 P 高津商会なんかはありますが、今日言って、明日なんていうのは無理でしょう。
安い制作費で言いますと、そういうところに頼むより、自分で調達したほうが安く上がるんです。発注するほうが高く、大変なんです。着物でも松竹衣装に頼むより、日本橋なんかの店で買って来たほうが、レンタルするより安く上がります。

出席者 しかし何度もお聞きしますが、その安い制作費には役者の出演料も全部入っているんでしょう。これを考えると、よく頑張って作っているんだなと思います。

出席者 先ほど言われた制作費は、スタジオドラマのケースでしょうね。

出席者 それはやはり(制作スタッフに)拍手を送るべきでしょうね。

木村 P 役者さんもこれしか出せませんと言うと、びっくりされます。そこはスタッフの心意気で、脚本料もそうですし（いろんな方に無理なお願いして作っています）。

出席者 立ち入ったことを聞きますが、撮影などで行った先々のタイアップはどうされているのですか。

木村 P 今回はタイアップのことは考えていません。2 時間ドラマなどではホテルとかタイアップできるのですが。

出席者 内容もさることながら、すべての面で民放連盟賞優秀賞をもらっても当然だと思います。

出席者 自主制作で作っていくという蓄積(ドラマ作りへの経験)が大きいですよ。

出席者 民間放送連盟賞受賞の際の講評を見たんですが、それによると、受賞作品「大正駅～新しい海の出現～」に対して、「セットや衣装ごとに登場人物の心象を象徴する色を巧みに配し、印象的である」と評しています。これはどういうシーンを指しているのですか。

木村 P 「4K」で撮っている色の配分もよかったのでしょうか。その回は男女の話なんです。演出論になるんですが、衣装というものが心情を表す。結婚式で彼氏に振られてという話で、女性は青のドレスを着ていまして、その青色というのは、ちょっと下向きな色と言いますか、彼女の気持ちもそういうもので見せた、そういう演出をしたんですが。青色というものを意識させて、それがまあ、評価した方が理解して、そこをうまく見ていただいたということでしょうか。それで「4K」カメラでいえば、舞台は大正駅だったんですが、そこに海があり、実際、「4K」で撮っても(編集室などでの映像は)DVDなので、「4K」の要素は見えてこないのです。しかし、美しさでは普通の「2K」に比べて、「4K」の高精細映像が見えたのかなというところもあったんでしょうか。

出席者 ドرامアは東京中心になっている。東京で活躍して全国区になった関西の役者をうまく登場する形にすれば、やっぱり関西の人もよく見るだろうし、関東の人もみるだろう。恐らくそういうことに対しては関西の役者の人も協力するだろう。これは実際に出るかどうかわからないが、都はるみがドラマに適するかどうかは別にして、関西出身の歌をうたう人とか上手く起用して、それで関西弁をあえてしゃべらせてやってみたら、いいんじゃないかと、この「環状線」ドラマを見ながらそんなことを感じました。

出席者 我々の時代は、関西弁のドラマについて、営業筋、スポンサー筋が“ごめんなさい”という事情がありました。勢いABCのスタジオで撮っていても、東京から(役者に)来てもらう。今は吉本の関係番組で関西弁が全国区になって(東京でも受け入れられている)。当時とは、ちょっと違ってきていると思いますが。

出席者 東京の役者のことで言いますと、これは数年前に聞いた話で今は違うかもしれませんが、月曜ドラマのことで東京キー局との話し合いの中で「大阪を舞台にしないでください。つまり大阪で撮っても大阪らしいところを撮らないでください。大阪でないところをイメージして作ってほしいという注文が付いた。腹が立ったけれど、結局、言うことを聞いて作ったという話を聞いたことがあります。大阪以外ならどこでもいいが、大阪だけはやめてほしいという、そんなことでした。

司会 大阪だとなんとなく泥臭くなるみたいなイメージがあったんでしょうね。

出席者 当時、東京の下町ドラマみたいなものは隆盛を極めていたわけですが、例えばお寿司屋さんのセットで店員さんが台本に「いらっしやい」と書いてあるのを「いらっしやい」と東京弁で言っても違うんですよ。東京の人がやれば「らっしやい」とこうなるんですよ。「いらっしやい」ではないんですよ。

出席者 僕は「4K」「8K」で演出することはないと思うのですが、「2K」から「4K」に変わった段階で、演出的に意識されたことはありますか。

木村 P 「4K」カメラでは、ルーズな絵、広めの絵を意識しましたね。町の遠景といった映像を入れたほうがリアルに町が描写できますね。よりくっきりした映像が撮れます。逆もありまして、あまり寄り過ぎますとバレてしまうんですよ。例えば付けひげをしたとか、メイクしているというのが如実に分かってしまうのです。

出席者 僕の時代はモノクロからカラーに変わったとき、経験したのですが、映画出身の女優さんがスタジオに来るなり、「私のサイズはここまでにしてください。それ以上のアップは撮らないでください」と言った女優さんがいましたね。

木村 P 「4K」はなかなかそういう意味では演出は考えますね。

司会 先ほど、技術の照明の話が出ていましたが、(今回のロケで)「エリオット」という便利なLED機材を導入したことによって、作品作りに専念できる環境が整い、ライティングすることができたと語る技術スタッフもいました。これも「4K」にま

つわる話としてそういったことも変わってきたのかなと思います。

木村 P 次から光を細かく再現できる「4K/HDR」にするんですが、そっちのほうが心配です。HDRというのは光の「4K」版というか、この部屋の扉を開けると、空が映っていますが、大体カメラで撮ったら真っ白になると思うんです。テレビドラマですと、光を描写するんで、それが真っ白にならずに映せるのです。本当のところはグラデーション(濃淡)が細かくあるんですが、「4K」だとそのグラデーションが細かく出るんです。それを演出としても面白そうかなと思うんです。光の細かさを全部表現していく。

司会 いかにもドラマ、ドラマしたドラマでなくて、ドキュメンタリーに近いような日常が映し出されている。そういった作品が少ないような気がするんです。だから高齢者はドラマを見なくなるという話がありますが、結局、心に響くものがなくなってきたのかなと思います。ただ今回の作品のように何でもない日常なんだけれど、琴線に触れてくるような、そういうシリーズであったのかなと想像したりするんです。

木村 P そうですかね。ちょっと突拍子もないものもありますが、“愛物語”ということで。

司会 このシリーズを作られて、一番大変だったのはどういうことでしたか。お金の話ももちろんでしょうが。

木村 P 本当にお金のこともありますが、社内、社外、プロダクション、タレント事務所に対して、こんな企画を考えているが協力してくださいと説明しても、どこまで伝わるかとか、キャスティングするうえでも、わざわざ大阪まで来てもらえるだろうとか、結果はよかったんですが、苦勞、氣遣いが大変でしたね。予算も予算ですし。ただ(スタッフの)心意気に賛同してくれたということですかね。うれしかったですね。社内への説得もありましたし。

司会 多分協力して下さった方、今どきこういう気持ちでドラマ作りをする人がいるんだなということだったんでしょうね。

出席者 この番組のことは初めて知ったんですが、自社の番宣でこの番組を扱いましたか。

木村 P 一応、PR映像は作って納品していましたが、僕もほとんど見ていませんので。

出席者 社内の企画会議やスポンサーに対して、どんなコンセプトでアピールされたのですか。

木村 P まず「大阪環状線～ひと駅ごとの愛物語～」のタイトルを提示し、オムニバスで作るんですが、その一つ一つが駅にまつわる愛というので、環状線のように回っている。それが全部つながっていて、10本を見終わるとまた一つの感動がある。そのような作品に広げていく、というところをアピールしました。単純なオムニバスではなくて、環状線というのはつながっているの、先ほどの作品の中に黄色い服を着た少女が出てくるんですが、この少女は一人つながっていて、各駅でシュークリームを探しているという設定になっています。お父さんが海外に出ていて、帰ってきたときにお土産としてシュークリームを渡すということになる。

なぜ、あの子が出てきたのかなと思われるでしょうが、それは10話目で寺田町駅にお父さんが現れるということにつながってくるというストーリーになっているのです。一応オムニバスなんですが、環状線ということで、またつながっている筋があります。

司会 キューピッドみたいな感じの可愛いお嬢さんのことを聞こうかと思っていたんですが、そうですか、10話全部見ていると分かってくるという筋書きですね。今日は現役のプロデューサーの木村弥寿彦さんに来ていただいて、久々の大阪制作の連続テレビドラマ「大阪環状線～ひと駅ごとの愛物語～」について制作のご苦労などたっぷりと伺いました。来年の放送になりますか「パート3」への期待が高まります。

以上